

今中コレクション 初代中村鴈治郎関係資料の一枚摺について―館蔵資料集補遺―

澤井 浩一

はじめに

平成二七年(二〇一五)は、大阪ゆかりの歌舞伎の大名跡である中村鴈治郎が四代目として復活する年となった。大阪歴史博物館では、前身となる大阪市立博物館時代から、初代中村鴈治郎関係資料を収集し、芸能部門の大きな核としていたことから、道頓堀開削四〇〇年記念に襲名を記念する意味も合わせて、特別企画展「道頓堀四百年記念―初世中村鴈治郎展―近代上方歌舞伎の巨星―」(平成二七年七月一日～八月二三日)を開催している。この展覧会の図録を兼ねることを想定して三月には『大阪歴史博物館館蔵資料集―初代中村鴈治郎関係資料―』¹⁾を発行しており、筆者がその編集・執筆を行った。本稿では、この館蔵資料集に収録した初代鴈治郎周辺の一枚摺資料について、紙数の都合で掲載できなかった翻刻を補遺として紹介するものである。

今中コレクションは、大阪歴史博物館の初代鴈治郎関係資料の核となる資料群である。最原の一人であった和菓子舗・鶴屋八幡の今中富之助氏の収集品で、昭和三八年(一九六三)度に大阪市立博物館(大阪歴史博物館

の前身)に寄贈された。内容は、役者絵、番付、写真・映画、レコード、鴈治郎自筆の書画、衣裳、小道具、愛用品、回顧の記念品等々多岐にわたる。屏風の金具や掛軸の表具にまで鴈治郎の定紋のイ菱を配し、番付や写真も独自の帖仕立てで保存している。その収集ぶりは、江戸後期の熱狂的な大坂の最原たちの姿を想起させるものがあり、鴈治郎研究の基礎資料ともなっている。

一枚摺資料について

一枚摺は、役者の襲名や改名などの節目に際して摺られた木版の刷り物で、最原等への配り物に用いられたものである。今中コレクションの初代中村鴈治郎関係資料には一〇枚(芸〇六七五～〇六八四)の一枚摺が含まれており、江戸時代末から明治後期にかけてのものである。本稿では、平成二七年に出版した館蔵資料集に写真掲載した、初代鴈治郎の活動期にあたる明治時代の八点に、天保期の一点を加えて紹介する。

芸〇六八一の初代實川額十郎改名摺物(丹頂鶴に短冊図)は、初代實川

額十郎が浅尾姓から改名した際の摺物である。後の上方歌舞伎の實川家の創始にあたる。この改姓に一首を添える初代梅玉、すなわち三代目中村歌右衛門は、文政五年（一八二二）の勇次郎から額十郎への改名を勧めたとされる。初代鴈治郎の師匠である初代實川延若や、中村鴈治郎家の系譜に連なる資料として収集されたものであろう。

芸〇六七五の四代目中村歌右衛門二十五回忌追善摺物は、初代鴈治郎の父である三代目中村翫雀が、その養父・四代目歌右衛門の二十五回忌追善興行に際して出版した摺物と考えられる。明治一〇年（一八七七）五月の芝居「一谷嫩軍記」では翫雀は熊谷次郎直実を演じており、本図にもその絵姿が二代目長谷川貞信により描かれている。東京から九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎が句を寄せ、上方歌舞伎の重鎮、二代目尾上多見蔵の句もみえる。

芸〇六七七の初代中村芝鶴改名摺物（二代目貞信鶴図）は、尾上梅鶴を改名し、三代目翫雀門人となった初代芝鶴（後に六代目伝九郎）の摺物。明治九年（一八七六）正月の天満大工町芝居の番付には初代芝鶴の名が見え、この頃の出版と考えられる。三代目翫雀とその門弟の他、初代延若も句を寄せている。

芸〇六七六の四代目實川延三郎襲名摺物（二代目貞信 二葉葵図と五鑽井筒紋）は、明治二年（一八八八）二月に没した三代目延三郎の名跡を正三郎が襲名する際のもの。襲名披露となる三月の角の芝居では、初代鴈治郎も同座し、初代市川右団治が襲名の口上を勤めたが、摺物にも句を寄せている。また初代鴈治郎の芸の形成に多大な影響を与えた中村宗十郎も角の芝居に同座し、摺物にその句もみえる。

芸〇六八二の六代目嵐吉三郎襲名摺物（二代目貞信 橋に烏帽子図）は、

明治三五年（一九〇二）六月に二代目中村雀右衛門の門人、雀三郎が、上方歌舞伎の大きな名跡である六代目嵐吉三郎を襲名する際のもの。襲名披露となる南座では口上をつとめた初代鴈治郎や同座した四代目芝雀（後の三代目雀右衛門）も摺物に句を寄せている。また、初代市川右団治や東京の九代目団十郎、五代目菊五郎、初代左団次のいわゆる団・菊・左の名もみえ、大名跡の襲名にふさわしい体裁となっている。

芸〇六八三の二代目中村梅玉・四代目中村福助襲名摺物（河辺青蘭 梅図）は、明治四〇年（一九〇七）一〇月の角座における襲名披露の摺物。二代目梅玉、四代目福助（高砂屋、後の三代目梅玉）はともに初代鴈治郎の相手役をつとめた。摺物には、鴈治郎のほか、鴈治郎と対立したことで知られる十一代目片岡仁左衛門の句もみえる。絵師の河辺青蘭は、近代大阪を代表する南画家である。

芸〇六八四の四代目助高屋高助十三回忌追善摺物（華阿弥素坊 蓮華柄香炉に梅菊花図）では、東京の役者たちに交じり、上方の舞台でも活躍した四代目高助の追善に初代鴈治郎も句を寄せる。

芸〇六七九の市川小団次襲名摺物（天受玉園 懸蓬萊図）は、後の三代目中村寿三郎の明治二年（一八六九）に前名、小団治襲名した時のもので、小団次の代数に数えられていない。摺物には大阪の役者たちが多く句を寄せている。芸〇六八〇の七代目嵐雛助襲名摺物（天受玉園 雛飾り図）は、明治六年（一八七三）二月の筑後芝居の七代目雛助襲名の摺物。三代目翫雀、初代延若、中村宗十郎ら、初代鴈治郎にゆかりの役者たちが名を連ねる。

以上の九点を写真と翻刻で紹介するが、紙数の都合で、芸〇六七八の坂東佳女三改めの中村巴丈襲名摺物（寛斎 落葉図）の掲載を割愛した。この摺物については機会があれば、別稿で紹介することとしたい。

図版と翻刻

部門番号・資料名に続き、①落款印章等 ②判型・法量等 ③刊行時期・行事・上演の情報 ④版元を記した。その後に翻刻を掲載し、図版を適宜配した。

芸〇六八一 絵師不詳 初代實川額十郎改名摺物 丹頂鶴に短冊



①丸印に花押 ②大奉書錦絵 三九・四×五四・

四 ③天保四年(一八三三) 正月 中の芝居

おのれ思ひたちしにはあらず／さりかたき
しさいありて／こたひミやうしを替る事に
は／なりぬ猶幾久敷御引立を／祝き奉らめ
やわ

春風の海一はひに初日かな

浅尾改／實川額十郎／俳名 延若

實に川も里も野山も／のとかさよ

千代の毛衣よく／着かへつる 梅玉

芸〇六七五 二代目貞信 四代目中村歌右衛門

二十五回忌追善摺物 四代目歌右衛門と三代目
翫雀の熊谷

①貞信写(印「貞信之印」)②大奉書錦絵
三八・八×五二・〇③明治一〇年(一八七七)

五月中の芝居二十五回忌追善狂言一谷嫩軍記

④本清版

かけまでも見そへは長し夜のふじ

東京市川団十郎

梅懸す雨感伏の茶会かな 全尾上菊五郎

天人の音楽もかな花の山 全中村芝翫

吊しや源子つくじ備へツ、 全岩井半四郎

手向や垣根に白き花うつき 全関三十郎

西へ入る夕月かけや時鳥 全中村仲蔵

花か風名の夜に雲のるかな 市川右団治

数の世や思ひ合せハ袖の露 嵐橋三郎

手向るや春行今朝の蓬の葉 市川荒五郎

願わくバ梅あらハさぞ花御堂 東京藤間勘左衛門

灌佛や諷ふも舞ふも法の声 全花柳寿輔

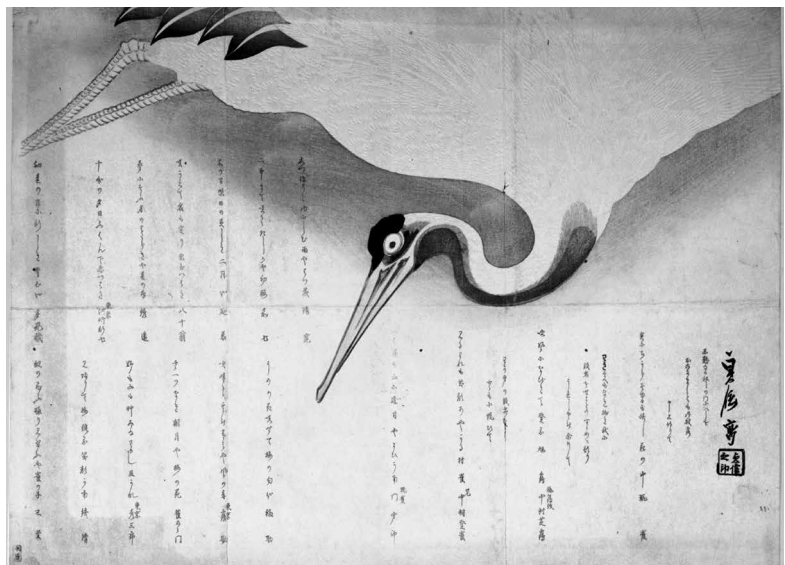
鶯ハ走ぬ梅の葉ハ若やきぬ 全狂言堂左交

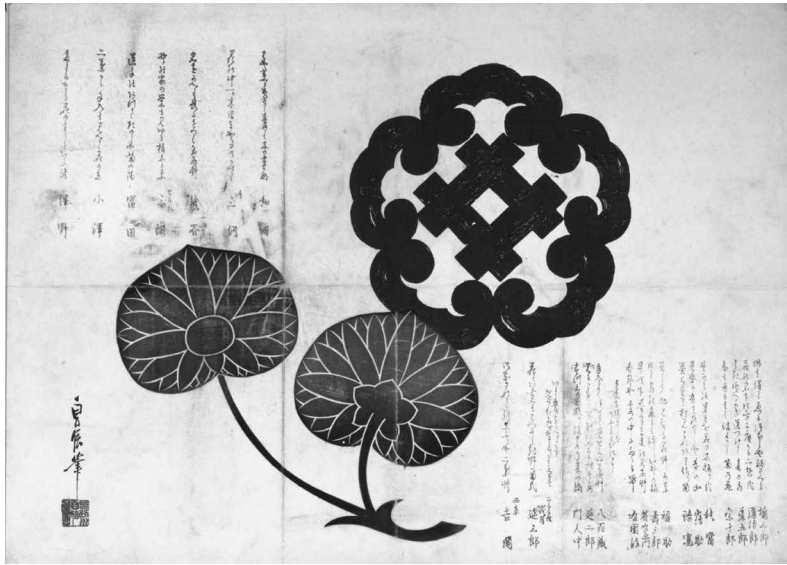


幾千代を経て衰へぬ実梅哉 全瀬川如臯
 手向なハ浪花へ走れ蜀魂 全河竹新七
 短夜や窓に消けり竹の影 全守田勘弥
 雨露の恵ミ伝記る実梅かな 坂東彦三郎
 立花やむかしを忍ふ朝の月 嵐璃寛
 白紙の道おしへ有よふ文鳥 中村嘉七
 西からも波来る花や弥生雲 実川延若
 忘れぬ簡や幾夜の長々し 尾上多見蔵
 手をついて濡れ候服もせず暮 三河佐吉
 啼て行雲なつかしやほと、きす 小部和三郎
 散るや咲や浮世ハ芥子の花畠 銭谷
 語らばや袖しめるまでたかむしろ 赤穂多
 ほと、きすしはしとてこそ思ひつれ 三栄」
 光陰に閑守なく翫雀日親とおくり名せしも
 星霜重ねて今年ハはやはいつと決の／
 まわりになりたるに純き身の佛もなく記外
 悔る折友人の助を持って覚束なくもおもき
 役をまねひこれをとふらふ事とハなりぬ
 へたなからまつ手向はや初茄子
 三代目 中村翫雀
 蓬の香や土瓶へ戻す佛の茶 東京 中村鶴助
 小竹の清き流れや手向水 中村雀右衛門
 てふく／＼や惣々合せし袖の露 翫雀門弟中
 世をいとふ熊谷笠や花供養 勝彦造

魁し手柄見へけり梅若葉 東京 竹芝寿作
 白梅の散ても残る薫かな 近松八十翁」
 芸〇六七七 二代目貞信 初代中村芝鶴改名摺
 物 鶴図 ①貞信写(印「貞信之印」) ②大奉
 書錦絵三八・八×五二・九 ③明治九年(二八七六)
 一〜二月頃 ④本清版
 しつほりと地にしむ雨やはつ蔵 璃寛
 二本まで咲てたしかや初桜 嘉七
 木の間照日の美しき二月哉 延若
 咲かえて名も定りぬ玉つはき 八十翁
 声にそふ身のはたらきや春の鳥 彦彦
 十分の夕日ふくんで赤つはき 東京 河竹新七
 初春の目に新しき野山哉 多見蔵」
 未熟なる私しの門に入しを／おこかましく
 も御披露／申し上侍りて
 実にちからそゆるも嬉し花の中 翫雀
 わきまへもなき拙き我に／改名をせよとの
 す、め二預り／うれしきの余りて
 吹風になびきて登る旭鶴 梅鶴改 中村芝鶴
 わか弟の改名を／ともに悦びて
 見るわれも笑顔あやかる村雀 兄 中村登雀
 つく□も山に道付やよひかな 翫雀門弟中」

うめの花咲せて梅の匂哉 福助
 吹晴る、雲のはしらや風の春 東京 鶴助
 雲一ツなき朝日や梅の花 雀右衛門
 野も山も艸みなわかし且かな 東京 彦三郎
 見移りて梅綻る笑顔かな 銭清
 親の飛ふ振り見習ふや雀の子 三栄」
 芸〇六七六 二代目貞信 四代目実川延三郎襲

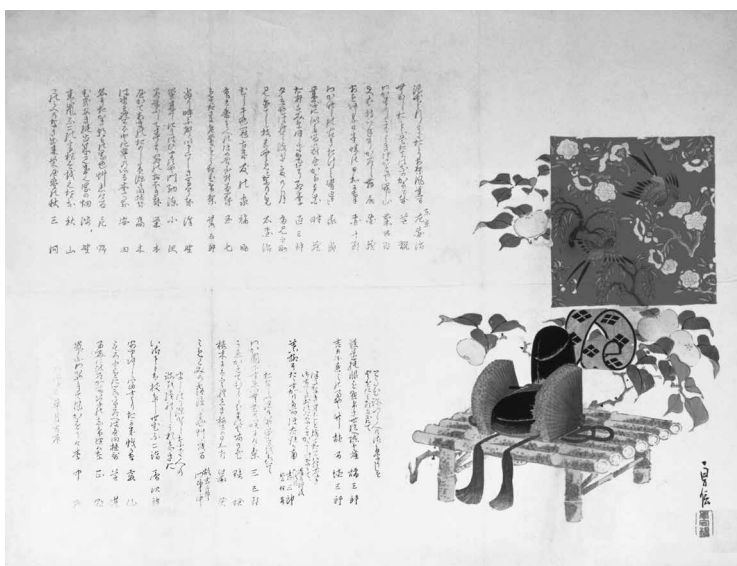




名摺物 二葉葵図と五鑽井筒紋 ①貞信筆(印)
 ②大奉書錦絵 三九二×五三・三 ③明治二一年(一八八八) 三月角劇場

時を得て恵るつほみや初さくら 橘三郎
 花の名を四方に廣かる二柴哉 鷹治郎
 よき處へよき道つけて春の水 荒五郎
 色も香もよく備わりて菊の花 宗十郎

○ 是からの栄えを花の木振り哉 我当
 見處の有てたのしや春の山 鶴助
 誉られて猶見はれあり作り菊 璃寛
 ○ 美しく旭見替る花野かな 福助
 日と月の恵ミも深いその桜 寿三郎
 早咲を誉るも春の名取艸 雀右衛門
 春風や霞の中に飛らる風 右団治
 主名を接れしを／共によるこび侍りて
 手入して咲せて見せる二葉艸 八百蔵
 見るわれも笑顔あやかる村すゝめ 延二郎
 すつくりと照渡りけり春の海 門人中
 いたらぬ身をかへりみず／かんばしき名を
 おこかましくも受つぎて
 花といふ名もはつかしき野菊哉
 正三郎改／四代目／延三郎
 こなされて引立ふりや二葉艸 西京吉岡
 はや薫る気さし春めく木の芽かな 和田
 花の中一ト木目立や若けいと 嶋三河
 名をかへて長に世つく名取艸 錢谷
 その家の栄も見ゆる接木かな せんば 三河
 造手のあつてたのしや菊の苗 富田
 二葉かト手人も見へて花の立 小澤



たしかなり花の主しといふ姿 澤野
 芸〇六八二 二代目貞信 六代目嵐吉三郎襲名
 摺物 橘に烏帽子図 ①貞信筆(印) ②大奉
 書錦絵 四三・八×五七・四 ③明治三五年
 (二九〇二) 五月 京都・南座 ④日本橋井上版
 浪花よりよきたよりあり風薫る 東京 左団治
 むかしおもふ花たちはなのかほり哉 芝翫

わか首ふして閑よきなかめや嵐山 菊五郎
 受花持つ手にかろし舞扇 團蔵
 あをあらし日本晴の日和かな 團十郎
 わか竹の古きたけより背延せよ 我当
 業平に似たる冠やかふる花 時蔵
 たねもみなほしき色なり紅李 延三郎
 夕立やはれて涼しき夏の月 多見之助
 見置てし枝春むめとなり二ける 右団治
 むし干や冠古き友の家 福助
 色も香も人のほめ合ふ新茶奉 玉七
 めてたさに老鷲もうたひけり 荒五郎
 当り呼ふ声いさましき高聞哉 澤野
 蛩来てにきはひますや門納涼 小沢
 若葉して春たり客のおほき哉 栄本
 やかて秋のたのしみ深き田植哉 高木
 此姿われるほとに実のある李かな 安田
 名にたかき朝日の恩や艸しける 尼野
 むきあきの出来見事也岡の畑 浅野
 春風不二の高ねを越えたりな 秋山
 このうへのなき出来栄や麦の秋 三河

つたなき身を捨てたまはす厚き御恵ミ
 おほけなくもかたしけなくて
 葉桃にたゝすかりたるほたるかな
 雀三郎改六代目嵐吉三郎 俳名鯉昇
 おなし門派のいや栄るを喜て
 わか園にすゑつむ花の咲にけり 三五郎
 うゑかえてひとしふますや苗の色 璃珪
 接木にはうれしき梅事の日和哉 巖笑
 ミめくみの露涼しさや艸茂る 故吉三郎門弟中
 ましはり深かりしなき人の跡を継れしう
 れしさに
 いささらは杖受とりせむ不二詣 鴈次郎
 あさあらし富士よりたかき職かな 霞仙
 もろともに節そろへはへ田植歌 芝雀
 雨毎にひろかる艸のしけりかな 正朝
 嵐山わかやきて風かをけり 中西
 明治壬寅年旱月
 芸〇六八三 河辺青蘭 二代目中村梅玉・四代
 目中村福助襲名摺物 梅図

①「青蘭女史(印)「河邊之印」「青蘭」 ②大
 奉書錦絵四五・〇×五八・九 ③明治四〇年
 (一九〇七)一〇月号座 ④島之内広田版

老若丈睦みてすわるいろは順
 梅玉の名跡相続人の撰定委頼を受け居し
 か彼是梨園を眺め三代福助ぬしを／おきて
 他にあらず縣らは全文丈へ相続／せられん事
 を進めまひらすになん
 預りし園の古梅植かへて 仁左衛門
 梅たより聞しか友の二三人 我童
 紅梅やたゝ一輪を指先に 徳三郎
 中々に薫りすくれし老樹哉 巖笑



老木之誓風情あるなり梅の枝

団蔵

よき枝の継木も園のぬしの腕

多見之助

はからすも茶日に貰ひし梅の花

右団次

園の梅に花をまろはす初音哉

三五郎

ひとしほの薫り高めよ此すは枝

橋三郎

一と寒みありて薫や梅の花

大善

新らしきつる梅は咲にけり

高木

嚴重に門のならひて梅の花

安田

寮守の斎して来る梅の花

白井

遠ち近の人の集ふや梅薫

秋山

梅か香やとこに立る朝烟り

浅野

此一枝床の薫り二楽しまん

尼野

鶯の時は残せ梅もらひ

三河

明治丁未陽月吉辰

」

世に高き故人の名を襲ふもおこましく
れと／御ひるき尊き君様方の御高庇に依

り／こたび改名致しました若輩なる倅政次

郎へ／旧名を譲りしかはりてまた御引立

ねかふ

身にあまる薫を受けて梅の花 福助改二代目梅玉

爪におよはさる厳父の名を譲り玉ひし／

かしこくもまたはつかしのわさや

重荷負ふひたゑに行す小春哉

政次郎改 四代目福助

久敷く埋れ木となりし名家の名も／再び花

咲時来りしうれしさに

また此所に再び匂ふ梅の花

芝翫

絶へし名家を継せられたる祝ひに

根に残る薫り世に出る梅の花

珊瑚郎

三代福助ぬしの梅の継木せられし□□

苔の蒸老木となれよ梅の種

玉七

いとおしかくし名家の名を受けられて／

うからの衆のよろこひ此上やある

皆おなし園の種なり梅の花

鷹次郎

梅玉てふ名を継れし福助丈か心やいかに哉う

れし

梅咲や誰れか住居か羨し

時蔵

貌も白く見ゆるやふなり月の梅

芝雀

をちこちに風薫たり梅林

伝五郎

それ／＼に鉢入れなむ鉢の梅

初代弟故福助 門弟中

朽るとも其名に高き匂ひかな

二見

見て居れば呼かけられつ門の梅

楠本

急ぐ旅とも暫し休まむ梅の下

東京 伊豆屋

地境の梅や匂ひを分て咲

松塚

催して落るや梅の一と雫

林

暮る秋は待たねと梅の月夜哉

佐藤

硯なとそえや梅の下□れ

古娘連

さすかまた浪花ハ梅の名取そ 京都 高砂連

芸〇六八四 華阿弥素坊 四代目助高屋高助

十三回忌追善摺物 蓮華柄香炉に梅菊花図 ①

華阿弥素坊(印) ②大奉書錦絵 四三・五×

五六・六 ③明治三一年(一八九八)二月

今年きさらきの二日は第四世助高屋高助ぬ

しが／身まかりてより十三回の忌日にあた

りぬと聞く／深草の野辺の桜し心あらは

ことしはかりハ墨染／に咲けと読まれし古

歌を口すさみしハ昨日のやうに／覚えしか

げに歳月の駒のあゆみかくも早きとの／か

□思へば我も人も心細うて伝るなりさるか

らに高助／ぬしの友人たち打つどひて追福

の事ども営ミ発句など／手向らるゝを居士

焼香して諸林の新声その餘音の／改たるを

悲しミ密妃の秘曲尺観るに由なきを嘆く／

なり 明治三十一年 桜癡居士しるす(印)

兼好のいひし「」や梅ハ散し 団十郎

春の夜やおもひよる日ハ啼子鳥 菊五郎

懐しき名古屋の空や春霞 左団次

との里も十三鉦の彼岸かな 団蔵

荊かねの顔わすれぬやはるの艸 福助



かすみ波て手向ん日ころ酒の徳
 春の日や小草をめくる観世水
 夕暮や昔芝居のものかたり
 春風や名も高すけの左馬之介
 身は雲のいつの加役も柳かな
 行水や小槌くるまのめくりす
 二の替り聞のかけふの回向かな
 たんほの鞍や藤や伊左衛門
 利所のもミ手違ひあしの鐘

権十郎
 時蔵
 芝翫
 河竹新七
 花柳寿輔
 竹柴其水
 右団次
 我当
 福助

よしあしはたれも申さす春の澤
 ひめときの有しを見てもさらく
 明治三十一年きさらき
 おとつさんハ出しぬするもとり橋
 次郎左衛門雛も代々ゆつりもの
 わらかたや雛の数に立ながら
 ちいさんの技ハ知らねと接植かな
 畔ぬまや真似ても出来ぬ歎違ひ
 親方の数へてくれし田打哉
 大勢て一人前やわふしわ会
 十あまり三ツのきさみき聞なれや
 おも影の鐘ならさる鏡かな
 ことし如月二日四代目助高や／高助か十三
 週忌の追善を営／む八年頃御ひいきの御餘
 光とありかたく感涙しむせひし／□くし
 梅の香やみのむし見ても父恋し

鴈次郎
 勝彦造
 訥子
 源之助
 田之助
 小伝次
 宇十郎
 由蔵
 門弟中
 きく尼
 船□
 訥升

此上ハひこすうに御引立を希ふとて
 旭のめくみうけて伸るや初ミとり
 米升改 市川小団次
 ともく御最辰をいのり
 活ふりに香の引立や梅の花
 春駒や遠くに聞ゆ鈴の音
 更名を祝して
 蓬菜や千代ともいわふ米の数
 粥占や人気十分そふ噂
 打連くのほる筏や初かすみ
 一器量ある花ふりの董かな
 もろ人の愛をうくるや福寿艸
 川竹にまさしく咲くや梅柳

彦三郎
 龜蔵
 駒之助
 璃寛
 延三郎
 國太郎
 扇女
 雀右衛門
 延若
 宗十郎
 翫雀
 七賀助
 雛助
 千之助
 松緑
 大五郎
 多見蔵

芸〇六七九 天受玉園 市川小団次襲名摺物
 懸蓬菜図 ①己巳年試筆天受玉園(印) ②大
 奉書錦絵三九・〇×五一・八 ③明治二年
 (二八六九)一月 ④摺物所はん寅版
 沙の大号を未熟のやつかれに継よとの仰再
 三辞すれとゆるしなけれハ其意ニ／継ふ尚

見あくるもまハゆき空や朝雲雀
 植かへて八千代目出たき椿かな
 福も寿もそなわるときそ着衣始め
 其気性わんく高し梅の花
 海山のひかへはしらやかさり竹
 朝榮やひと樹すくれて梅匂ふ
 染あけし手綱薫るや春の駒
 時を得て若鮎のほる早瀬かな

〇

緒木にもまされ若枝の接さくら

鶴の舞ふ日和つゝくや玉のはる 三升
 御最員の声をちからや揚雲雀 ゆき
 はてのなき海静かなり初日影 九蔵
 水もの高し千鳥の群る夕 新車
 ○ 初旅は華のころなり京登り 団蔵
 ○ 鶯や春にかゝやく声の艶 子団次



人の山はしめて見たり戎市 門弟中
 ○ 其功のきつと見へたり二日灸 三栄
 あつはれな月の出堺よし春の梅 赤穂多
 芸〇六八〇 天受玉園 七代目嵐雛助襲名摺物
 雛飾り図 ①天受玉園(印) ②大奉書錦
 絵三九・二×五二・四 ③明治六年(一八七三)
 二月筑後芝居 ④摺物処/道頓堀相合橋北詰
 西へ入/はん寅
 改名を祝して
 敷あとへおかるやうなり強い風 璃寛
 振よさに皆曳こする小松かな 宗十郎
 ずん／＼と伸る柳や南うけ 橘三郎
 との姿見てもりつばや春の朝 筆之助
 其功のきつと見へたり二日灸 福助
 是からハひらくる名やら花の春 寿太郎
 見あくるもまばゆき空や揚雲雀 延若
 ○ はや薫る気さし今から菊の苗 松緑
 花をまつ樹のたのもしき初桜 七賀助
 ○ 華の日に吉左右のよき紋りかな 東京彦三郎

黄鳥の声おもしろき山路かな 翫雀
 梅の候目から殖けり人出いり 仲蔵
 春らしき姿や桃にはつ霞 菊五郎
 若桜一樹すくれて旭の恵方 芝翫
 ○ 善松の栄ゆる春の朝日かな 右団次
 あと咲も一廉といふ椿かな 蝦十郎
 適な目出端よし梅の花 大五郎



頌

花となる芽をはやみせよ此接木

多見蔵

此一樹すくれ薫るや桃の花

大長平

二の花も色香おとらす咲つはき

正作

当二月ハ先雛助の一回りの忌ニあたるとて

歴々の誉る言葉や二の替り

けんびし

梅の香や声も花有枝の鳥

慶女

追福を営ミゐふニ就而ハ未熟のやつかれ

梅の香や声も花有枝の鳥

はなもよし落ハなほさら塵もよし

三右工門

奥山

ニ養子に／なれと御す、め再三辞退すれと

大ぼくになれと育つる小梅哉

門弟中

川竹に賑ふ春の往来かな

宗助

もゆるし有らず／此上ハぜひなく仰ニ随ひ

友々によるこひあふや桃はたけ

抽出てまさる色香や咲菫れ

沢山の中に秀し雛な哉

尚薫れ接木の梅の花盛り

たてまつりて

昇る旭に際たつ松や鶴の声

八十翁

ひく位見かわす春のにしき哉

阿古多

何事も差図願ふや雛祭り

七代目嵐雛助

梅の香の芳し凡四里四方

三津介

富士までも伸し度もの春の風

母升女

○

○

○

○

○

註

(1) 『大阪歴史博物館館蔵資料集—初代中村鴈治郎関係資料—』大阪歴史博物館、二〇一五年。

(2) 嵐雛助の代数には諸説あり、註(1)の館蔵資料集では、早稲田大学演劇博

物館編『演劇百科大事典』(平凡社、一九六二年)にしたがい八代目としたが、

ここでは国立劇場の表記および原資料の表記の通り、七代目とした。

(参考文献)

日本芸術文化振興会国立劇場調査養成部調査記録課近代歌舞伎年表編纂室編『近

代歌舞伎年表』大阪篇、第一〜四巻、八木書店、一九八六〜一九八九年

日本芸術文化振興会国立劇場調査養成部調査記録課近代歌舞伎年表編纂室編『近

代歌舞伎年表』京都篇、第四巻、八木書店、一九九八年

伊原敏郎著『歌舞伎年表』第六巻、岩波書店、一九六一年